

Eberhard Schockenhoff: *Bonum hominis.*
Die anthropologischen und theologischen
Grundlagen der Tugendethik des Thomas von Aquin.

Tübinger theologische Studien, Bd. 28
 Mainz, Matthias-Grünewald-Verlag, 1987, 613 S.

K. リーゼンフーバー

1950年代までのトマス・アクィナスについての研究は、主に彼の形而上学、人間論、認識論に属する理論的な問題に集中していたが、1960年代以降その研究領域は倫理的、神学的諸問題にまで拡大する。このうち、トマスの倫理学の研究の関心は、ここ10年ばかりの間とりわけその法論に向けられることが多くなっている。おそらく、倫理的規範がいかにして理性的に根拠付けられうるかという問題に向けられた現在の議論が、研究の関心をこのように方向付けているのであろう。つまり、この議論において義務と規範の概念を基礎とする近代的、カント的な倫理学に対する再評価が行われつつある中で、トマスの倫理学の提出する法の概念がこの動向への接点として注目を集めているのである。しかし、法概念が『神学大全』に含まれる倫理学体系の中で中心的な位置を占めるものではないということは、すでにくりかえし指摘されている通りである。つまり、『神学大全』における倫理的考察は人間の至福への問いによって始まり、徳の概念を基軸として展開するのであって、法概念が問題にされるのは第Ⅱ-1部の一般倫理的考察のようやく終り近くになってからに過ぎず、またその取り扱いも比較的簡潔なものにとどまっているのである。

本書は1986年にテュービンゲン大学カトリック神学部に提出された学位論文であるが、著者が目指すのは、トマス自身の思考の歩みに密着しつつ彼の実践についての思想を「徳」という中心的モチーフから展開するということである。そもそも徳とは、何らかの抽象的規範を基盤とするものではなく、人間が自己の本質に適合した行為を行う中で獲得する自己の存在の完成を意味するものである。従って、徳倫理学は本来人間論的な、つまり哲学的な基盤に立っているのである。それゆえ、徳概念がキリスト教的文脈の中に置かれたときに神学的にも有効に機能しうるかどうかということが問題になる。言い換えれば、人間に対する神の恩寵の業を「徳」という枠組みの中で

考えることが可能であるのかどうか問われることになる。それゆえ、徳倫理学は徳概念の神学的正当性を証示しなければならない。人間論と神学との間に存在するこの緊張関係に対応する形で、本書はまず「トマスの徳概念の聖書的、哲学的源泉、およびその神学的解釈の端緒」を取り扱う第1部、そして『神学大全』における「徳思想の体系的展開」を特にその人間論的基盤を考慮しながら詳細に跡付けるもっとも長大な第2部、さらに「徳倫理学の文脈における信仰、希望、愛の神学的解釈」を探る第3部から構成されている。また著者はこのような全体的展開の中で、トマスに特有な神学と哲学の区別と統合がいかに実り豊かなものであるかを、神学と哲学各々の根本概念の持つ方向性、射程、限界を測りつつ、目的を見失った単なる学問論的考察に陥らずに、説得力をもって示すことに成功している。

本書の基本的な意図を理解するためには、「結語」を参照することが有益であろう。ここで著者は、徳概念が人間のかつキリスト教的な道德において発揮する長所を以下のように示している。①徳は人間を端的に善くするものなのであるから、それは存在の秩序に対する適正さを持っている。ただ、この適正さを根拠付ける規範は、人間の偶然的な事実状態に求められるべきものではなく、人間存在の持つ目的から定められているものなのである。また、徳概念が倫理の基軸として機能するとき、「目的」はもはや制限を課す命令といったものを意味するのではなく、むしろ人間の完成の可能性全般を開くものであって、目的志向性によって開かれたこのような場の中で人間は具体的な自己完成を様々な徳の形成を経ながら現実化していくことが可能になる。徳は確かに人間の自己完成に具体的な道を示すものであるが、このような洞察に基づくならば基本的にはむしろ善の歴史的、あるいは個人的な多様な実現を可能にする自由な空間を開くものとして理解されるようになるのである。②恩寵によって示される人間の目的は、「徳」によって、つまり信仰、希望、愛という対神徳によって実現される。徳概念は、まさにこの認識により自然本性的な完成と恩寵による完成とを、言い換えれば人間の道徳的自律と神の救いの業とを包括するものとなる。また、人間の目的を存在との関係において人間論的に「至福」として規定し、さらに目的への方向付けを、人間を構成する諸能力の共働と成長という観点から理解することを可能にするのは、徳概念にほかならない。③確かに理性は意志を導くが、同時に理性を親和性による善の認識へと深めていくのは、倫理的徳である。このように、知性的徳と倫理的徳の相互作用は、倫理的認識の構造を明らかにするのである。

以上のように著者は、トマスの倫理学の目指す目的が「人間論的一神学的倫理学」である、ということを示すが、このような理解を背景として著者はまず第1部でトマスの初期著作における徳思想の発展を追求する。徳に至福がどのように関係するのかという問題についてのトマスの思想は、歴史的にはいわゆる『山上の垂訓』における至福八端の言葉と『ニコマコス倫理学』の双方をともに源泉とするものである。ただ、彼の倫理学の原点というべきこれらの源泉からの彼の思想の展開は決して直線的なものではなく、むしろそれぞれの著作ごとにこの原点の内包する様々の異なった側面が取り上げられてきたのだといえる。例えば、『マタイ福音書註解』で、至福は「徳→功德」、あるいは「約束→報酬」という図式で把握されていたが、『ニコマコス倫理学註解』になると、徳と至福、活動的生活と観想的生活、不完全な至福と完全な至福といったいくつかの区別が明確に打ち出されることになる。また、『命題集註解』の第3巻では、キリスト論という伝統的な枠組みの中に独立した人間論的徳倫理学が導入されることによって、聖書の思索と哲学的思索の結合が初めて遂行される一方、『対異教徒大全』では、人間を含めたすべての有限者のほたらきが固有の目的へ向けて規定されているということが、神は善であり、世界を完全な仕方でも統率している、との根本洞察から理解されることによって、倫理学の神中心的な基礎付けが行われるのである。著者は以上のように初期著作におけるトマスの倫理学の根本的な出発点がどのようなものであったかを明らかにするが、この示唆に富む有益な考察の中に『真理論』が提示する倫理学の基本的立脚点の分析が見られないことが唯一惜まれる。

内容的にもっとも重要な次の第2部において、著者は『神学大全』第Ⅱ部において体系的な完成に達したトマスの徳思想に肉薄しようとする。この第2部（および第3部）は、トマス自身が中心的主題を配列した順序に従って論述されており、従って『神学大全』第Ⅱ部の註解として読むことができる。ここでの著者の本領は、個別問題の形而上学的、ないし倫理的な分析においてよりは、むしろ大きな連関や広い展望を示す際に発揮されているが、いずれにせよこの論述は、テキストの正確な知識と深い読みと、哲学と神学双方における膨大な研究文献の広汎な検討を基礎としているという点で、特筆に価する。

著者が示す通り、トマスは『神学大全』第Ⅱ部の序言で倫理学を「人間は神の人格的似姿である」と説く聖書の教えの具体化として理解しているが、ここで彼は人間の内的な自発性を出発点とする人間論的な方法を神学的に根拠付けているのである。ト

マスによってこの自発性は、常にその自然本性的な基盤の層と自由な実現のはたらしの層とが織りなす重層的統一において考察されている。この自発性は、至福への自然本性的欲求において展開を始める。第2章ではこの至福が論じられる。至福が完成に達するのは神直観においてであるが、不完全な形ながらこの生においても、活動的ないし観想的生活の実現する自然的幸福においてのみならず、信仰、希望、愛の内に芽生えつつある完成の中に、至福がすでに始まっているのである。倫理学と徳論の全体は、このような至福への欲求を基盤とすることによって、人間の終極目的の地平の中に位置付けられる。この終極目的への志向は、神に向けての開きにほかならず、それゆえ幸福主義的でないかたる自己充足性をも超えていくが、他方で終極目的自体は一般的なものとして形式的に把握されているに過ぎないため、それが自由な意志のはたらしを外側から規定するという他律的性格を持つことはないのである。

第3章では、徳倫理学という観点から、自由を問題にする。トマスの自由論の出発点は、至福ないし普遍的善に向けての意志の自発的な方向付けと自由裁量 (*liberum arbitrium*) の中立性の二つであった、というのが著者の見解であるが、著者の試みるこのような分離は、なるほどトマスの抛り所とした源泉において見られるものであるが、トマス自身のなしとげた総合の本質を十分にとらえていないように思われる。同様に、この章で自由な自己規定の構造、および知性と意志の相互補完について立ち入った分析がなされていない。これに対し、自由論の徳概念との連関の指摘は、啓発的である。この連関は、次のようなものである。自由が自らの目的に達するのは、自らを善に堅く結び付けることによるのであるから、自由は本来もろもろの徳によって導かれることを自分の方から求めるものである。また反対に、徳とは一定の方向付けを具えたハビトゥスであるが、その成立のためには相反するものへと関わることでできる自由な能力を前提とするのである。

次の第4章では、欲情的能力と怒情的能力という二つの感覚的欲求能力を基盤とする人間の情念の二重構造が論じられる。情念はそれ自体としては倫理的価値（ないし反価値）を持たないにもかかわらず、徳倫理学において一定の役割を果たす。つまり、獲得的および注的倫理徳のあるものは、情念の基礎にある感覚的欲求能力を基体、担い手とするのであり、また情念は直接には理性の命令に従わないのであるから、それが人間の行為の中に原動力として統合されるためには、倫理的ハビトゥスによる感覚的欲求能力の形成が必要なのである。

第5章は、ハビトゥス論を取り扱う。トマスの徳概念の根幹は、まさにこのハビトゥス論によって独創的な仕方で展開されるのである。ハビトゥスに関しては、次の点が指摘されている。初期著作では、ハビトゥスの堅固さはそれが主体に根付く強度として人間論的に根拠付けられていたが、後期著作である『神学大全』は、この堅固さを第一義的にはハビトゥスの対象の側の恒常性から理解し、そうすることによって善のはたらきかけに対する精神的受容性という神学的に重要な契機を強調している。こうして、恩寵によって注入された徳というハビトゥスは、ハビトゥスの特殊な例としてではなく、ハビトゥスそのものの原形態として示されるのである。

第6章で考察されるのは、徳概念である。ハビトゥスが善そのものへの志向の中での行為力として規定されるようになると、ハビトゥス概念は徳概念へと特殊化されるのである。徳の重要性は、情念、意志、知性が統合する場が、まさに徳にはかならないという点において明らかとなる。さて、この徳概念を主題としているということからすれば、この章は本書の中で中心的な位置を占めるべき箇所なのであるが、徳概念はここでその一般的、形式的側面において解明されているに留まる。つまり、ここで著者の関心は、徳の一般概念を示し、これを人間論的に分節することに重点を置いているのであり、具体的に知性的徳や倫理的徳が、あるいは四つの枢要徳(特に知慮)がそれぞれどのような固有の性格を持っているのか、という問題については簡単に概観されているだけなのである。

著者の中心的な問題意識の照準は、このような徳論の具体的内容を超えて、むしろ徳論の神学的完成(注入徳および対神徳論)に向けられているのであり、第7章はこのような意味において注入徳論を主題とする。ここで著者の目的は、トマスの倫理学が、神学に哲学的なハビトゥス論、徳論を余りにも浸透させ過ぎている、という懸念に対し、トマス倫理学の中心をなす徳概念が神学固有の領域の中で発揮する有効性を浮き彫りにしようとするところにある。人間の行為の構造の中ではたらく恩寵の機能を解明するということが、注入的な倫理的徳についての神学的教説の意図である。つまり、対神徳を導き、完成するのが常に恩寵のはたらきであるように、自然本性的な倫理的諸徳の場合においてもそれらを導き、完成する力を持つのは、恩寵によって注入される愛徳なのである。

このように、トマスはアリストテレスを超えて哲学的な徳論を最終的には神から贈られた恩寵という神学的なモチーフによって仕上げ直す。それゆえ、彼の徳倫理学

は著者が第3部で取り扱っている信仰、希望、愛という対神徳の教説において完成を見るのである。

第3部の冒頭の第8章で、まず信仰が考察される。信仰は、人生の目的を、つまり第一の真理としての神を人間に教える。こうして、人間は人生の全体を信仰が教える一つの目的に向かう一つの行為として生きることができるようになり、この生は「永遠の生命の始まり」へと高められる。このようにトマスが示した信仰の終末論的展望が、神の助力に対する信頼に基づいて永遠の至福への確固とした期待へと成長するとき、希望が生まれる。第9章では、この希望が論じられる。希望は、時間的な諸善を、それらが永遠の完成を予表する象徴であるかぎりにおいてのみ対象とする。また、トマスは希望の「徳」としての性格を、特に愛徳から発する他者のための希望において強調する。締めくくりの第10章では、愛徳が主題となる。トマスが作り上げた諸徳の体系の究極的頂点でありかつ最終的根源であるのは、愛徳である。善への情念および神との友愛としての愛徳は、徳の生命に無限の成長の活力を与え、「諸徳の形相」として諸徳を最終的完成という目的へと導くのである。

以上のように、本書はトマスの徳概念の展開をその人間論的基盤から究極の神学的意義付けに至るまで跡付けている。この跡付けは首尾一貫したものであると同時に、内包される問題を明確に意識しながら、細かい点にまで立ち入って行われており、このことがこの著作を魅力あるものとしている。なお、本書の終りには、徳倫理学は「法および規範の観念による補足」を要する、との著者自身による言葉がある。ゆえに、この徳と法という倫理学の二つの根本的出発点の間の連関がどのようなものであるのかということについて、著者自身による解明が望まれるのである。しかし、いずれにせよこの研究はトマスのテキストと思想への忠実さを現代の哲学的、神学的な問題意識と融合させ、徳の思想を再活性化することに、大きな成功を収めていると言えるであろう。

(矢玉 俊彦訳)